

異口同音一戦後「日歌台唱」について

蔡易達さんの話を聞く（第一回勉強会 2004/06/19）

古川ちかし 2004.6.25

▲感想

『「日本(語)」の歌曲が、戦後台湾の流行歌曲（生活の中の歌曲かな）として残っていった』という。『「日本(語)」の歌曲が、歌詞を台湾語に替えて歌われつづけた』という。『「日本」や「日本語」とつながった歌曲が、それと意識されないままに、受け継がれていった』とも表現できるのだろうか。それは、『「日本の歌曲」のリズム、音楽の雰囲気はどこかに残った形で、台湾のいろんな身体が生き続けた』というふうに言っているのだろうか。この表現は、妥当だろうか。

『「北京語」の歌曲は、生活全体の中にではなく、ある限定された局面にのみ入っていった』と言えるのだろうか。つまり、それは『(いわゆる戦前、戦中生まれの「台湾人」の) 身体のもつリズムや音楽の雰囲気というものと、「北京語」や「大陸から来た人とその生活」などはあまり結びつく機会がなかった』というふうに言っているのだろうか。蔡さんのお話の中には、北京語の歌曲について、日本(語)の歌曲と比較しての言及はなかったので、これは想像ですが。

仮に「日本」あるいは「日本語」歌曲が、「(日治時代に身体形成した) 台湾人」の身体の一部のようなものだったとしても、それは(例えば金美麗さんのように)『台湾人の中に<日本>と<日本語>が生き続けた』と表現されるべきではないと、けっこう強く思います。

なぜなら、「日本」や「日本語」というときに私たちの頭の中に出現する「日本」は、一つの「国」としての統一体であり、「日本語」とは一つの体系に完結した言語だけれど、<日歌台唱>の中で「台湾人」の体の一部となっているように見えるものとは、そのようなく統一体>や<体系>(の一部)として「意識されて」はいないんじゃないかと思うからです。『台湾で人々が「日歌」を「日本の」あるいは「日本語の」歌曲として歌ったわけではない』と蔡さんは言います。ここ(この表現)に、何か重要なことが示唆されているように感じました。

『意識されてはいなくても、事実として、それは<日本>であり<日本語>なんだ』と強弁もできるのかもしれませんが、そうした強弁、話し方は、どのような立場からの話し方だと考えればいいのか。

私たちは<日歌台唱>という現象を「日歌台唱」と名づけ、説明するときに、日(本)や台(湾)といった、今の私たち(蔡さんの言う「歴史世代」でしょうか)にとっての世界についての話し方(見方)で話す(見る)ことを、当然だけど止められない。そこで、<日歌台唱>とは「日本」(「日本語」)の歌を、「台湾語」で歌う、というふうに表現する(話す・見る)。こうした表現の前提にあるのは、「日本」や「日本語」が、「台湾」「台湾人」の「外」に存在するモノだ、ということのように思えます。私たちは、そういうふうにしか話せなくなっているけど、そういう話し方はどこかで対象を捻じ曲げている感じがします。

「対象を捻じ曲げて」という言い方をしましたが、『じゃあ、捻じ曲げずにまっすぐ正しく見る見方や話し方ってえのがあるのか!?!』ということになりますね。「外からの視点(エティック)」「内からの視点(イーミック)¹」という比喻で言うならば、上記は「外からの」乱暴な視点っていうふうに見える、

¹音声学(phonetics)の語尾「etic」と、音韻学(phonemics)の語尾「emic」を使ったPikeさんの造語で、前者はある言語の言語音を、<観察可能な現象の表層の差異にあくまでも注目して記述しようとする>視点というか方法。後者は、<その現象の背後に想定されているコードに即し、一部の差異をあえて無視して分析単位を同定しようとする視点>と、ものの本には説明されています。例えば、「日本語」を音声学的に記述すると、それは「日本語話者」には自分の言語の音とは思えない—自分が意識していないような音の差異までも記述されてしまうけど、そんなのは本人にとって、知っていても知らなくても関係ない、ということです。自分が「日本語の音はこうなんですよ」と意識できる、例えば50音とか、音節とか、そういうのが音韻論の基盤だ、ということでしょうか。私はPikeさんの議論をよく知っているわけではなくて、むしろ、その後、人類学のほうに転用されたエティック・イーミック議論、つ

ということであって、決して正しい見方があるという意味ではありません。エティックな見方も一つではないように、イーミックな見方にしても一つではないでしょう。問題は、私は、じゃあ、なぜある一つの見方から話そうとするのか、あるいは、私は、なぜある見方について「対象を捻じ曲げている」ように感じるのか、ということだと思います。

前述したように、私は金美麗さんの話し方に「捻じ曲げ」を感じ、蔡易達さんの話し方にすっとくるものを感じます。それは前者が **etic** で、後者が **emic**、といった感じがするからなのかもしれません。でも、これも、そんなに単純に **etic/emic** とは割り切れない（一体どんな基準でそうできるのか？）でしょう。が、再度しかし、蔡さんの話し方に、対象を対象に即して見てみたいという願望というか姿勢を感じるのです。

金美麗さんが「台湾人の日本精神」について話すとき、彼女は「台湾人」をそれぞれの歴史と見方をもった一人ひとりの人間として話してはいい感じに感じます。「日本」や「日本語」、「台湾」や「台湾人」という抽象的な概念のもとに、人間をくまとめて話している気がします。蔡さんもまた、一人ひとりの人間について話しているわけではありませんが、少なくとも人間を「国」や「言語」といった抽象概念で切っていないように思いました。

高砂義勇隊の生還者たちの中に、今でも「わーれらたかさごぎゆうたい」と（もちろん「日本語」で）歌う人たちがいるのは、彼らの生きてきた記憶の中で義勇隊とそれにまつわる（繋がった）もろもろの経験、もろもろの人々、その中での自分自身とこの歌が「繋がっている」からだと思います。それを、彼らは「日本とつながっている」とか「自分を今でも日本人だと思っている」とか言うことは、（これらは学生の感想としては、耳にたこができるほどポピュラーな感想ですが）極めて乱暴な話し方であり、《対象に即していない》としか言えません。義勇隊の生還者で、この歌を歌わない人たちは、また、彼らなりのこの歌にまつわる歴史と経験がある。

個々の人の歴史と経験、そこから来る見方、話し方—そういうものに即して、実際にその人ではない私が、どのように、その人（たち）について話せるでしょうか。答えは分かりませんが、私は、私がその人（たち）の歴史と経験そのものに《興味があり》、私と《その人（たち）》とをどこかで重ねてみようとすることによって、ひどい乱暴さは避けられるのではないか、という程度にしかとあえずは考えられません。

▲『言語』について改めて考えさせられること。

1. スピーチ・コミュニティという考え方

日治時代に「日本語」が「台湾人」の生活のすべての面に浸透した、という言い方は《乱暴》でしょう。子どもたちは（人によるでしょうが）家庭では「台湾語」、学校では「日本語」だったという話は一定程度、信頼できるかもしれません。エティックな言い方をすれば「日本語」が「使われた」（浸透した）のは、生活の特定の領域だったということです。

こうした状態は植民地主義という特殊な状況での、特殊な状態だ、とは言えないと思います。実際には、かなり多くの地域で多言語使用（こういうエティックな言い方しかできませんが、これがエティックな見方であることは忘れないでいたいと思います）は普通の状態だといえます。

『昔は共同体が閉じていて（自給自足で）、一つの「言語」が生活のあらゆる領域に完全に浸透した』というようなお話があります。こういう話はくスピーチ・コミュニティ（言語共同体、でしょうか）>という概念として、言語学系の学問で常用されています。が、この話はぎりぎり信じられない。そういう（言

まり、外からある社会を研究者の分析的な（勝手な）視点でバッサバッサと記述していくのがエティックな視点で逆にその社会に生活する人の視点・理解を受け止めようとするのがイーミック、こんな感じで理解しています。

語) 共同体などというものは過去も現在も一つも存在しない、ということではなく、そういう(言語) 共同体が一般的、つまり大多数であった、という話に対しては非常に懐疑的にならざるを得ない、という意味です。

じゃあどうということかということ、大多数の共同体は、実は「閉じて」いなかったと思うのです。例えば「日本」列島において、『自給自足的な農村社会は「峠」によって隔離し、閉じていた』(例えば、柳田国男だったか折口信夫だったか和辻哲郎だったかの『峠考』) というような話があります。こういう「話」に対して、例えば、先ほど他界された網野善彦さんなんかは反証をあげて反論します。いずれの村落も、完全に自給自足ということはありません、ある種の交易、交流というものを(近代の歴史家が想定するよりも) 活発に行っていた、と網野さんは言いますね。「閉じて移動のない」農村社会というイメージは江戸時代以降の「脱封建主義」の産物だ、というふうに言ってもいいかと思えます。

「閉じる」というのは、強い中央集権的な権力が、その強権をもって人工的にある共同体を「閉じる」ことを意味することだ、と私などは考えます。「閉じる」というのは中央集権的な権力が制度として機能し始めて以降、初めて可能になった「お話」で、しかも、そのお話通りに完全に閉じることに成功した例というのはない、と思うのです。で、もし、そのような前提で言うならば、生活のすべての領域に「ひとつの言語が浸透している」ということはあり得ないということになります。(ただし、あるコミュニティの中に、特権的に「ひとつの言語」だけで生きることが可能な人たちというのがいるかもしれないことは、否定しにくい。ここでのポイントは、ある言語共同体というものがあって、その中の人々は大多数が「ひとつの言語」だけで生きてきた、ということへの疑義ですから、一部の特権層のことは、とりあえず無視します。)

昔から自給自足の共同体というものはなくて、程度の差はあれ、すべての共同体(村落かな)は、隣の共同体、どこかの共同体と際を接して、接触を持ち、人々の生活のある局面(領域)は、際を接する「彼ら Other」から得たものを身体に受け入れる、という側面があって成り立ってきた、と考えるわけです。その中に「彼らのことば」もまた、含まれてきます。

また、宗教的な場面では、そうした場面を取り仕切るための「ことば」があり、それを自在にあやつる人(々)が中心になって取り仕切る。葬式の際には、また別の「ことば」があり、結婚の際にはまた別の「ことば」があり、交易に際してはまた別の「ことば」があり、といったように、生活のすべての面に一つの「ことば」が浸透するという言い方には注意が必要だと思うわけです。

私は「ことば」と「言語」を、ここではとりあえず使い分けています。ここでは、「言語」は抽象的な意味でのことばのまとまりであり、「ことば」は実際に人々が使うことばを指す、というふうに使い分けています。前者(言語)は、一体、どのようなもので、いつ、そうやって、そんなものが「想定」されるようになったのか、そんなことが疑問になります。

2. 「脱封建主義」と「脱植民地主義」

前段で「脱封建主義」過程において、コミュニティというものが「閉じた自給自足の集落」としてイメージされたけれど、それは事実とは違うのではないかということをおっしゃいました。「脱植民地化」の過程でも、おそらく同じように「前時代」に対するある種の《虚像》を作りだして、それを否定的に表現してゆくということが行われた／行われているのではないかと私は思っています。

脱植民地主義の「虚像作りとその否定」の言説は、一般的に言って、「完結した体系としての言語」「統一体としての国民国家」というような近代主義的な概念の上に成り立っていると感じます。台湾や韓国を代表例としてその他の地域でも脱植民地化の言説は、最初に「言語」や「国」という概念を立ち上げておいて、そこから植民地時代を見て、ある像を作り上げ、これを否定してゆくことによって脱植民地化を遂げようとする。そういうふうに表示したらどうだろうか、と思うわけです。これを、次に、もう少し具体的に言います。

台湾の脱植民地化の言説は、①中華民族主義的な言説、つまり、「日本」に蹂躪され、分断された「中華(漢)民族」が、その「本来の統一性・一体性」を回復する=独自の言語(北京語)をもって独自の

国家を形成することが、脱植民地化だ、というもの（特に 1947-1980 年くらいでしょうか）、②台湾（みんな）民族主義的な言説、つまり、「オランダ」や「日本」や「国民党」に蹂躪され、分断されてきた「みんなん人」が、その「本来の統一性・一体性」を回復する＝独自の言語（台湾語）をもって独自の国家を形成することが脱植民地化だ、というもの（特に 1980 年代から現在まで）、また③台湾ナショナリズム的な言説、つまり「オランダ」や「日本」や「国民党」に蹂躪され、分断されてきた「台湾土着の人々」が、その「本来の統一性・一体性」を回復する＝独自の言語（おそらくは国語）をもって独自の国家を形成することが脱植民地化だ、というもの（こちらも台湾島内では特に 1980 年代から現在まで、島外では 1950 年代から現在までの海外一日本、米国一での台湾独立派の言説がこれにあたるだろうか）。今の議論のための整理としては、こんな感じになるでしょうか。

「国や言語」を志向しない脱植民地化の言説があるとしたら、それは、おそらくある種のグローバリズム（ポスト国家主義）を志向する言説となるのではないかと思います。そうした言説は、今のところあまり力を持っているとは思えません。もちろん、それは上記の①～③の言説が強いために、比較的に見えにくいということなんでしょうとは思いますが。

このように、脱植民地化の言説は、植民地時代を「本来の統一性（国）と本来の一体性（言語）が蹂躪された時代」ととらえることによって、後植民地時代を「本来の国と言語の回復」ととらえるわけです。無論、そこで「本来」と言われることは、作られる「本来」、発明される「本来」であり、台湾に《本来から》「民族的・文化的統一性」や「国」や「一つの言語」があったわけではないのに、です。

3. 日治時代の「日本語」注入をどうとらえておくか

一早く中央集権的な体制に工業化、都市化を平行させた「日本」が、国家とそれを支える言語的な統一といった概念を台湾に持ち込んできた。それまでに、「台湾」の知識分子の中にあつた国家思想がどのようなものであつたのかは分かりませんが、おそらく西欧の近代化の過程で生み出されたような国民国家とその言語といった枠組みとは違った思想だつたのではないかと想像し、生活人がそのような国家思想や言語幻想をもっていたとは考えられません。

「日本」は、植民地「台湾」において、本土に先んじて実験的にとさえ言えるしかたで「言語による統一性」を作ろうとしたように思います。明治維新を通して構築される「脱亜入欧」（福沢諭吉）という基本姿勢の基にある国家思想は、当時の「日本」にとっての西欧の帝国主義国家の模倣だつたと思います（現実に侵略を支えた「国体」思想が、西欧の帝国主義とは若干の異質性をもっていたといったことは、議論の都合上、今は問題にしません）。「国民の精神的血液」（上田万年⇒時枝誠記）といった表現で定義された「日本語」は、朝鮮半島と台湾を「日本」とするための要と言われました。「日本」には、そのような意味で、強い国家意識と、言語意識があり、それらを朝鮮と台湾に十分意識的に注入したと言えます。（ほぼ同時期に、ほぼ同様の仕方でも「沖縄」にもこれが注入されたのだと思いますが、とりあえずは沖縄は議論からはずしておきます。）

ですから、日治時代に、台湾人に注入されたモノは、現代的な意味での単にひとつの言語としての「日本語」であつたというよりも、「(天皇によって形作られる) 国」「(天皇の臣民としての) 国民」「(国民の精神的血液としての) 言語＝日本語」等々の概念があいまって注入されたと言うべきだろうと思います。金美麗さんなんか好きな「日本精神」という表現は、もし、そのような思想注入を指して言っているのであれば、その言い方には、なにほどこかの妥当性があるのかもしれない。

「日本」は、たしかに「台湾人」の生活のすべての領域に「日本語」を浸透させる意図をもっていたと思いますが、それを「台湾人」が（身体的に）「国」「国民」「言語」といった概念を受け入れていったその結果として達成しようとしたのではないかと思います。朝鮮でのように無理やりに「創氏改名」などの強引な政策を行わなかったのも、そういうわけだろうかと思えます。それが、一体、どの程度達成されたのか、いろいろな人の話を聞いても、私には一概に言えないとしか言えない気がしています。

「日本」の占領政策の中で、学校—学問—行政—書き言葉、という領域に関しては「日本語」化が進みました。歌曲の分野でも、学校の校歌、学校で習う唱歌などは、すぐさま「日本語」化したのでしょう。小学校からの「学問」も、「日本語」化したでしょう。それは、例えば「教育勅語」のように暗唱ということを通して、身体にリズムとして叩き込まれた、と思います。国語の教科書なんか、典型的にそうなんでしょうね。

そこで育った子どもたちは、《ちゃんとしたことば》としての「日本人のことば」と、《普段着のことば》としてのみんなん語や客家語や山のことばなどを使い分けて大きくなった。ある種の「正装」と「普段着」の区別は、たとえ学校へ行かなくても、子どもたちの身体を訓化していったでしょう。

今のみんなん語は、みんなん語を文法的な上位構造として、そこに「日本人のことば」の語彙だけを取り込んだ形跡が多々見られますね。つまり、普段着の部分ではみんなん語ならみんなん語が主要言語であったということです。このことから、みんなん語人にとってのみんなん語の「普段着の世界」は、生活の比較的大きな範囲に渡っていたことが想像されます。（「サヨンの鐘」なんかで山の人たちが東京語で生活している—ああいうのを学生たちが見ると、ちょっと信じてしまうんですね。）山のことばの中にも多くの「日本人のことば」からの語彙が残っています。日付（〇月×日）、集会や政治関係のことば、「祈り」など宗教的なことば・・・ここでも、山のことばが（山の人たちにとって）生活の主要言語だったと言えます。

一般的に言って、「日本語」の方は、使用領域が限られていたと言えると思います。なにせ、学校の先生たちなどによって常に監視されていることばですから、上段で触れたような雑種化を起しにくく、「ちゃんとした」場面でのことばだから、誰もが使用にあたっては十分なモニタリング（自分のしゃべることばの当否、正誤を自分で意識的にチェックすること—自己監視ですね）をすることが習慣付けられる。台湾の知識人の一部が今でも「日本語で思考する／日本語でしか書けない」と自己申告しているのは、そのようなモニタリングの成果（？）なのだと思います。それはともかく、使用領域としては、学校、学校とむすびついた学問、行政、政治、一定規模以上のビジネス、そんなところでしょうか。

人は、学校、行政、ビジネス、こういった領域とまったく無関係に生きるのは難しいですから、どうしてもどこかで「日本人のことば」に触れざるをえない。そういった特定の領域を通じて友人や知人ももつ。そうした友人、知人間では表向き「日本人のことば」を使うかもしれない。酒を酌み交わすときに歌う歌は「日本人の歌」かもしれない。

「日本人のことば」に対して、「これは敵性言語だ」というような敵対意識をもっている場合には、上記のこと（例えば酒の席で「日本人の歌」を歌うこと）はあくまで表向きのことになるでしょう。しかし、少なくとも日治時代の安定期には、一般的に言って、「日本人のことば」は上位言語ではあっても敵性言語とは感じられなかったのではないかと思います。

ですから、「日本人の歌」「日本人のことば」は、「台湾人」同士の友情や共通の経験とむすびついたものとして、彼らの記憶にはいつていつた結果、それらは「彼らの歌」、「彼らのことば」となったと言ってよいと思うのです。しつこいようですが、彼らの身体の中での特定の「日本人の歌」は、「日本」や「日本語」という外在的なモノと繋がった歌なのではなくて、彼らの経験と記憶を繋ぐ歌なのだ、というのがポイントです。

4. 最後に

脱封建主義の言説にしても、脱植民地化の言説にしても、特定の政治的目的に沿った視点を準備し、そこから（eticに）対象を記述していきます。特に目だって使われるのが「国」と「言語」のようにも思います。それを、emicな視点から見直してみようというのは、それはそれで別の畏にはまる可能性があるにしても、できるところまでやってみたほうがいいのだろうなと思いました。

*長くなってすいません。